

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(小学校用)

都道府県名

山 口 県

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	山口市立湯田小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	4	3	3	3	3	2	21	35
児童数	104	116	111	96	101	112	6	646	

研究の概要

1. 研究主題

自ら学び続け、心豊かにたくましく生きる子どもをめざして

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

全学年算数

児童の理解の状況に差が出やすい教科であるため。

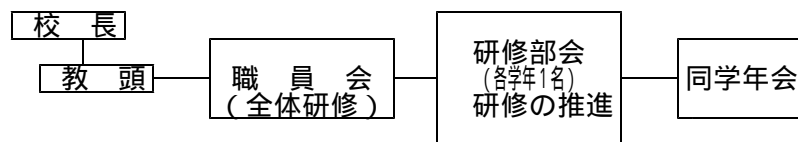
(2) 年次ごとの計画

平成 14 年度	<p>テーマ 教材の開発と指導形態の工夫・改善 研究の見通し(仮説) 個に応じた教材の開発と指導形態を工夫・改善することにより、確かな学力が定着し、自己教育力の伸長を図ることができるであろう。</p> <p>研究の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学力向上のための教材・教具の開発 ・ 学力向上のための指導形態の工夫(少人数指導・教科担任制) ・ 各教科の基礎的・基本的事項の確認 ・ 地域・保護者への啓発 <p>研究の方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 授業研究及び実践記録の集積 ・ 指導者を招聘しての受指導 ・ 先進校視察及び復命 ・ 各研究部での研究(教材開発部・指導形態部) ・ 学力検査の実施
----------------	--

平成 15 年度	<p>テーマ 指導方法の工夫・改善と評価の一体化 研究の見通し(仮説) 指導方法の工夫・改善と指導に生きる評価を進めていくことにより、確かな学力が定着し、自己教育力の伸長を図ることができるであろう。</p> <p>研究の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学力向上のための指導方法の工夫・改善 ・ 指導に生きる評価の在り方 ・ 保護者への理解と啓発 <p>研究の方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究授業の実施 ・ 指導者を招聘しての受指導 ・ 先進校視察及び復命 ・ 学力検査の実施(3年生以上)
----------------	---

平成 16 年度	<p>テーマ 魅力ある授業・深まりのある授業をめざして</p> <p>研究の見通し 子どもたちにとって魅力的な授業を展開することにより、確かな学力と豊かな心情を培うことができるであろう。</p> <p>研究の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学力向上のための指導方法の工夫・改善 ・ 指導に生きる評価の在り方 ・ 評価を生かした授業改善 ・ 保護者への理解と啓発 <p>研究の方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研究授業（公開）の実施 ・ 指導者を招聘しての受指導 ・ 先進校視察及び復命 ・ 学力検査の実施（3年生以上）
----------------	--

(3) 研究推進体制

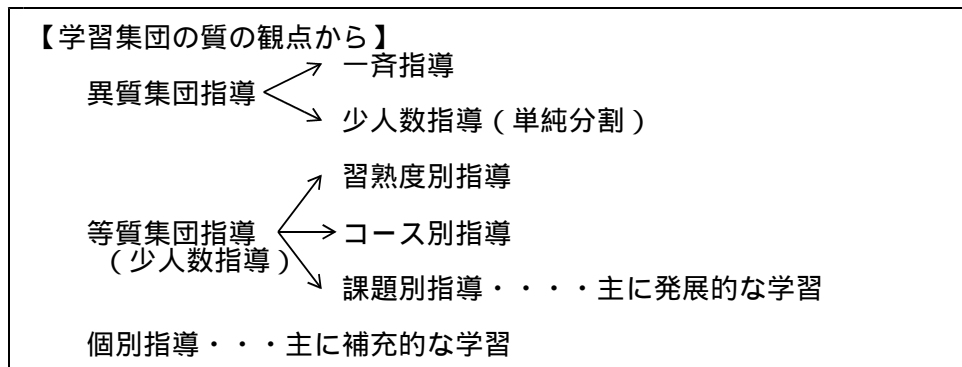


平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1 研究の成果

(1) 個に応じた指導について

これまでの研究から、個に応じた指導に関して下図のようにまとめてみた。



私たちの指導対象集団は、大別すると異質集団か等質集団である。少人数指導という観点で大別すると、単純に分けて指導するか、ある意図をもって分けて指導するかである。たとえどのような指導形態を取ろうとも、個に応じたきめ細かな指導ということは大切なことである。

個に応じた指導ということで一番大切なことは、何をねらいとして指導するかということである。算数科には算数科のねらいがあるが、それと同時に本校のねらいとする生きる力も獲得させなければならない。その意味において、どの指導方法も大切なものだと考える。さらに言うと、少人数指導（習熟度別指導）さえしておけば、子どもたちに学力がつくのだとは考えていない。

ア 異質集団での指導

一斉指導や単純分割指導のような異質集団の指導が算数科においてもとても大切である。なぜなら、算数の力がある子やそうでない子、あるいは自己表現力が上手な子やそうでない子、友だちの発言をしっかりと聞ける子やそうでない子など、いろいろな子どもたちがいることによって、一人ひとりが生かされるということは大いにあり得るからだ。別な言い方をすると、そうだからこそ指導のチャンスが広がり、授業に幅と深まりが出るのである。個に応じた指導ということの意味の中に、個を生かすということがある。

イ 等質集団での指導

等質集団での指導は、その単元の内容や子どもたちの実態、そして学校行事等を考慮した上で実施している。その中でも、習熟度別指導は、「数と計算」領域においてとても有効な指導形態である。本校では、その単元に関する事前テストを行い、その結果を子どもたちに示した上で、子どもたち自身と保護者との相談の上で、習熟度別のコース選択をさせるようにしている。子どもたちにとっても習熟度別指導は、好意的に受け止められている。なぜかという、自分でコースを選択することは、自分の力を自分自身が知って、もっと伸ばしていこうという意欲のもとに学習でき、そしてその時間内に理解できた、分かったという実感を感じることが出来るからである。指導する側にとっても、一人ひとりの児童のつまづきを見取ったり支援したりする上で有効である。これはコース別学習にも言えることだ。ただし、子どもたちや保護者のアンケートの中の少数意見としてある、子どもたち同士の中に差別意識を醸成するのではないかという懸念は、私たちが十分に留意して指導しなければならない。

課題別指導については、その単元計画の中で主に発展的な内容を指導する際に自己選択させて実施している。ここでのポイントは、課題が子どもにとって適度な障害になっているかどうかである。様々な学習状況にある子どもたちに応じた課題を設定するという意味においては個に応じた有効な指導方法だと考える。

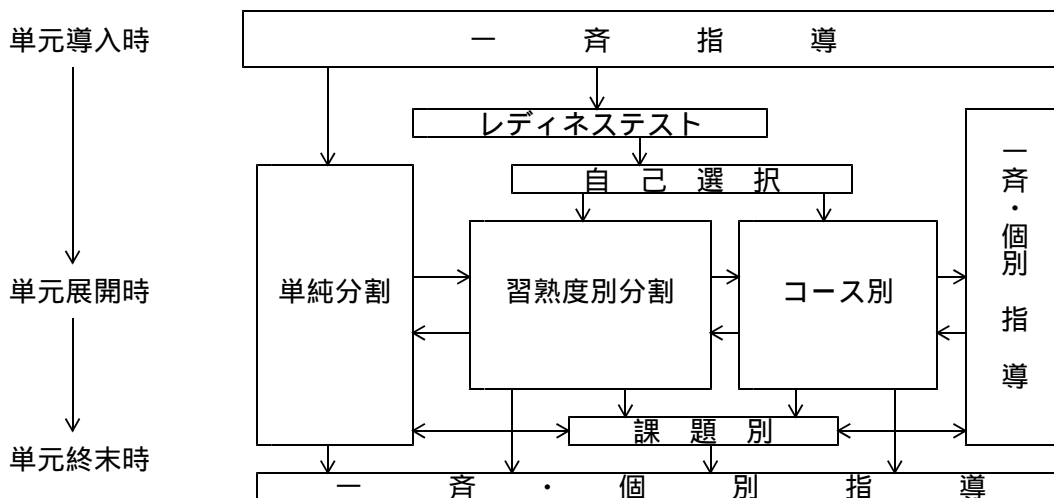
ウ 個別指導

個別指導は、月曜日の放課後（6校時）を個別指導の時間として位置付けている。ここでは、主に学習の定着が不十分な子どもを対象として、担任及び少人数担当が数名の児童を集めて指導している。

また、長期休業中において、3日間程度の特別指導を3年生以上の児童を対象として、全教職員の協力の下に行った。これは、児童・保護者にとっても好評で是非続けて欲しいという多くの声があった。いろいろな学年の子どもたちの様子を知ることができるよい機会であった。

(2) 指導形態について

本校では、下図のような様々な指導形態を念頭におきながら授業実践してきた。



発展的な内容を考慮した指導

課題別分割

単元のまとめの段階で発展的な内容を、ねらいは同じで課題が違うものを設定し、興味・関心によって選択させる方法。

学習したことを使って、子どもが興味をもち、適度な障害のある課題を設定することで、楽しく、達成感のある学習ができる。単元のまとめに適している。

補充的な内容を考慮した個別指導

放課後等

学習の定着が不十分な子どもを対象として、担任や少人数担当が指導に当たる。授業外の個別指導を担当だけでなく他の教員が協力することで、時間の確保が可能になる。

長期休業中

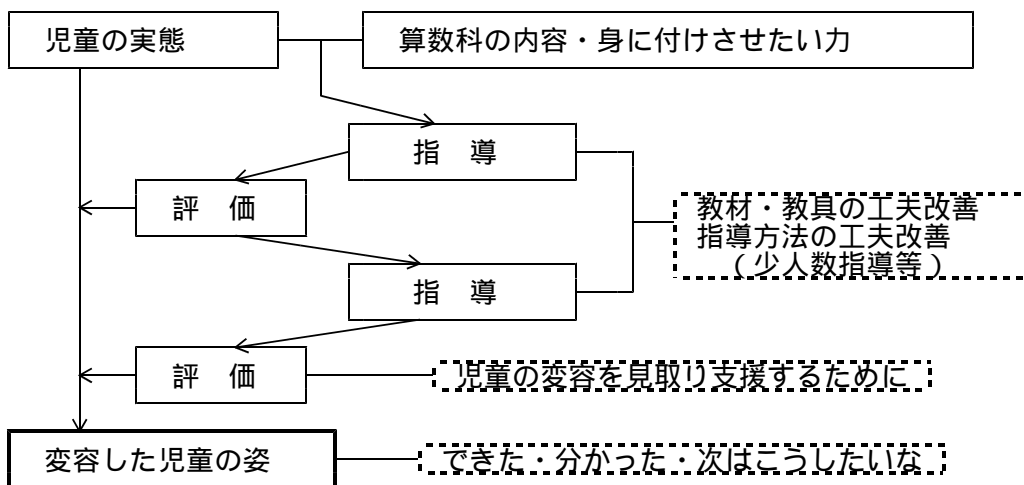
休業中は、3日程度の特別指導日を設定し全教職員で指導に当たる。

(3) 指導と評価の一体化について

「何のために子どもたちを指導するのか」と問われれば、「昨日よりも今日、よりよく変容した児童の姿を求めているからだ」と答える。このような子どもの成長をめざ

した指導を展開するには、指導と評価は別物ではなく、評価の結果によって後の指導を改善し、更に新しい指導の成果を再度評価するという、「指導に生かす評価」すなわち、「指導と評価の一体化」を充実することが大切である。

私たちは、「計画、実践、評価」という一連の活動の中で、「指導と評価の一体化」を次のようにとらえている。



ア 計画

今年度は、これまでに作成していた算数科の評価規準（各単元レベルでの評価規準と評価基準）を見直した。今後はそれを日々の授業の中で、具体的にどう実践に生かしていくかが大切なことである。

イ 実践

評価については、授業実施後に行うことが多いが、授業中において子どもの状態を見取り、すぐその場で支援をすることも大切である。

具体的な事例として、6年生の「分数のわり算」での指導と評価の実践例を紹介する。この単元は、学級を解体した習熟度別4分割で指導した。

どンドンコース	40名程度	教科書及び練習問題（発展問題も含む）
しっかりコース	30名程度	教科書及び練習問題
じっくりコース	25名程度	基本的に教科書を中心に
ゆっくりコース	15名程度	教科書をていねいに

観察法による評価

評価項目に基づいて、子どもが調べたり、発表したりする様子などをつぶさに観察し、賞賛や助言などの評価をすることにより、学習の意欲を高め、次の時間の支援策の改善に生かす。

例えば、「じっくりコース」では、「ノートをとっている間に授業が進み分からなくなる」や「教科書の問題の意味がよく分からない」といったつぶやきが見られた。そこで、必要に応じて学習プリントを準備し、じっくり考える時間を確保したり、子どもたちの関心が高い問題を準備し、比較・検討することへの興味・関心を高めたり、その都度支援策を改善していった。

チェックリスト（座席表）による評価

具体的評価規準に基づき、授業中に見取りや授業後の評価をする。記入した項や数等によって、努力を要する子どもへの個別指導や次の時間の支援策の改善に生かす。

算数日記による自己評価

子どもたちが「自らの学習状況に気付く」、「自分を見つめ直すきっかけとなる」、「その後の学習や発達を促す」指導を意図的に行っていくことを重視している。そこで、その時間の評価を子どもと共有するために、授業後に「発表」「理解度」「教師の教え方」「感想」からなる算数日記を子どもたちに書いてもらっている。記述から、理解度や考え方、興味・関心度などを理解すると共に、コメントや助言の記入により、次の時間へつながるより発展的な思考を促したり、興味・関心を高めたりする支援を行っている。

ある児童の算数日記より

発 理 教

今日は、量や時間が違っても、カステラを食べる速さが、分数の割り算で

比べられることが、よく分かった。問題がおもしろかった。

ウ 評価

前述のような指導と評価の実践を通して、「指導目標は達成されたか」、「評価規準(基準)や評価方法、評価の時期は適当であったか」などを検討する。そして、その結果から次の学習の「指導と評価の計画」を修正し、指導の改善点を明確にしていく。

2. 今後の課題

(1) 指導方法の工夫・改善について

低学年については、空き教室等の関係でTTを中心に指導を行ってきたが、ワークスペースや教室内を工夫した少人数指導を実施していく必要がある。中・高学年については、過去2年間の実績から、ある程度単元の指導形態についてはどれが有効であるかが分かってきた。今後は、児童が算数科にさらに興味・関心をもち算数の力をつけるために、算数的活動を多く取り入れた授業づくりを工夫していきたい。

(2) 指導と評価の一体化について

今年度は、評価規準及び評価基準作りに取り組んだ。各単元・授業レベルで、有効に活用し、指導に生かしていくためには、具体的な場面でどう評価し、どのように次時の指導に生かしたかを検証していく必要がある。評価の精度を高めるためにも全体研修等で検討していきたい。

(3) 保護者への理解と啓発について

いろいろな場面(参観日等)で保護者に対して、算数科の少人数指導について説明をしてきた。10月の全保護者対象のアンケート結果を見ても、ほとんどの保護者が好意的にしかも期待感をもっておられることが分かった。しかし、一部の保護者の中には、習熟度別指導に対する懸念や不安を感じている方もおられることが分かった。授業公開をさらに拡大することを通して、啓発と理解に努めていきたい。

(4) 研究成果を広めるために

この2年間は、一年ごとの研究成果を紀要という形でまとめ、発表してきた。来年度は、指定最後の年度でもあり、3年間の研究成果を広く公開していく場を持ちたいと考えている。

学力等把握のための学校としての取組

教研式NRT(全国標準診断的学力検査)

実施学年 3年生以上全学級
調査の目的 算数科の学力を把握するため。
実施内容 算数科
時期 6月

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

研究紀要(Q&A方式)の作成と配布
フロンティア地区協議会での発表(平成16年1月30日)
参観日での授業公開
保護者を対象としたフロンティア説明会(年度始めと終わり)
ホームページの作成

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 6学級以下 7~12学級
 13~18学級 19~24学級
 25学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 一部教科担任制 その他
- 【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無